青葉

第1号〜第3号

青葉会，京都一中時代

1919

青葉
第

目次

青鞜

第一號

金毘羅山の夕暮

今西　蛁蟟。

夕日は何時の間にか落ちて、一番星がきらめき出した。麓の村で撞く入相の鐘が悲しげに響いて、淋しさは段々と募つて行く。静原川は夕靄の中に滔たとして、静かな山中の空氣を振動させてゐる。永劫の神秘を包んでゐる様な丹波高原の山々は恐しい迄高く連つて、見るから引っ込まれさうな深い沈んだ青色となった。一面に凄滄の氣が漂つてゐるとしか思はれない。一番近い天ヶ嶽からして、頻に引き入れ様引き入れ様としてゐる。一萬尺の日本アルプスに接した時、こんな感じがあつたらうか。

暗くならぬ中にと、足下を警めながら、突き出でたる岩石の間を急

いだ。　水雲が次第に厚さを増して、十六夜（イザヨヒ）の月はいくら待っても出て来ない。　漸く谷へ下りた時には夜はもうすっかり、其、魔性を現はしてゐて、深い杉の木立の暗黒な中へ閉ぢ込めてしまった。

（一月十八日の日記より。）

望天門山　　李太白。

天門中斷楚江開。　碧水東流至此廻。
兩岸青山相對出。　孤帆一片日邊來。

箕囊嶽登山記

K・I

回顧すれば明治二十三年に憲法發布のあつてより、ここに満三十年今日の紀元節忘るべからず。いでや我輩も君が代を高唱せんとムツクリ、顔を揚ぐれば、九時十五分前。失つたと飛び起きて屋根の上見えるわ〳〵。山！ 雪！ 雪の山！

十二時、朝晝飯を食ふ。チリリン〳〵、オツト来たぞ。

「モシ〳〵箕裏へ行かないか。」

「今日、是非共今日行くのか、誰が行く。」

「井街と僕とだ。」

「他の者はどうした。」

「誰も行かぬ。正午迄に出町橋へ。」

西堀の奴が果して誘ひよったな……へ今日の勉強は十六日に廻せ
と、アミノ主義を發揮して出發。
十二時出町橋を發す。出雲橋を渡って鞍馬街道の泥濘を
蹴り、疏水支流北岸の三角点を征服。標高七〇・一米突。三等
なり。示す處の方向は磁石とスッカリ異ってゐる。此の處小高くて
眺望可。キンカンをねぶって下りかけると、
「そんな處、歩いて貰ふと、困りまっせ。」
と金切聲。何ぢや三角点を自分とこの庭石だと心得ておや
がる。「アホ。」比叡アルプス、今日は素敵だ。すぐ様撮影。豫定
の一時に松ヶ崎着。狐ヶ坂を登る。墓地あり。其東側に捷路を發
見した。寶池は大部分結氷してゐない。小石だと、スケートする所が

ある。池の西端を迂回して岩倉村に入る。川を渡って藪陰を通っ
て、目白の啼聲を見付けて、雪をたべて迷子になった。藥屋に教はった
通り行くと、突き當りに狂病院がある。大きな建物で、青白い憐ぽ
い顔の見えなかったのは、何より幸だった。右に折れると大雲寺の馬
場へ出た。北の方へ一寸上って昌子内親王陵。義延法親王墓を拜す。
下宿養成館あり。山際を傳って北進す。比叡が難しい顔色をして
ゐる。ウソの名寶嚢の池には、犬の足跡がついてゐた。石を投げても氷
は中々割れぬ。これより、約四町にして、東側の谷に入り、右手の屋根
は十町も續いて、頂上三角点に至る。午後三時。水井の空が黒く
なったと思ふ中、粉雪がチラ〱とやって來た。
頂上で雪は五寸。西堀氏の建議で焚火を初む。余醱酵に苦む

と見て、義に勇む二士は專ら枯枝撿つ拂ひの任に當り、余を火番とす。火番はよい樣だが、時に、無形の怪物が顔と云はず、手と云はず、嚙みつく危険を如何にせん。　これ、比良の比良坊が所業であると恐れた。

「オイようい、こつたぞ、早く來い」

「何んだろう消えかけてるやないか」

「盛衰興亡、これ世の習だ。」

硫黄粉をまくと、ポッと、焔を揚げる。　松の生木は一番よく燃えた。

「アッツッ、　今々は何だ。」

「比良坊だ〱」

「アッ、己もやられた、お助けー！」

山上の宴は開かれぬ。酒（実はりもだが）一酣にして、紀念撮影する事四度、立つたり、坐つたり、眼をむいたり、鼻を打つたり、（待つた〱、それはこの間の話だ）五時頂上發、征服の護はりも瓶中に入れて、三角標柱の下にかくす。黄色は雲間を離れて、日光は雨の如くに降りそゝいだ。

（未完）

大正七年十二月二十四日の日誌　三雲祥之助

晴。　午前九時より三名の友と十三石山に志す。途すがら登山の効果を論ずらく「身体を強健にするは固よりなり。困苦缺乏に堪へ壯大なる氣を養ふ等の外、神佛崇拜の念も少ず生ず。信仰の力あるに非ずんば行者と雖も、よく未踏の深山に攀づる能

鏡世界

蛁蟟

人間世界の外に、三千世界ありとは、紫陽道人の言、先日、虎雄さんは月の世界のお話をなさいました。これは鏡の世界でございます。

〔第一回〕

白（猫の名）は何にも知らんので、皆黒（猫の名）の悪戯で御座います。白は三十分許の間、お母さんから顔を洗つて貰つて居りましたから、其の様な悪戯をした筈は御座いません。

母猫の虎は、可愛相に白の耳を捕まへて、其顔を鼻から先き、グル〳〵撫でゝ居りましたが、黒は白より先に洗つて貰つたものですから、美くちやん